

6361 - 1378
平成22年3月4日

各関係機関長
各病害虫防除員 様

宮崎県病害虫防除・肥料検査センタ - 所長

平成21年度病害虫発生予察特殊報第4号について

平成21年度病害虫発生予察特殊報第4号を発表したので送付します。

平成21年度病害虫発生予察特殊報第4号

- 1 病害虫名：ニラえそ条斑病
- 2 発生作物：ニラ
- 3 病原ウイルス： *Iris yellow spot virus* (I Y S V)

4 発生確認の経過

平成21年11月、県央部のニラほ場において、葉身に淡黄色から白色のえそ斑点や大型のえそ条斑を生じる症状が確認された。そこで、宮崎県総合農業試験場生物環境部においてRT - PCR法により検定した結果、*Iris yellow spot virus* (I Y S V) によるニラえそ条斑病と確認された。

ニラえそ条斑病は、平成8年に千葉県のアルストロメリアで初めて確認されており、ニラでは平成15年に高知県で確認されている。九州では、平成19年に大分県で、平成21年に福岡県で発生が報告されている。

宮崎県では、平成19年にトルコギキョウでI Y S Vによるトルコギキョウえそ輪紋病の発生が確認されている。

5 病徴

発病初期に葉身に長さ数mm～10mm程度で不明瞭な退緑症状が認められ、その後はっきりとした淡黄色～白色のえそ斑点や大型のえそ条斑を生じる。症状が進むと、これらは融合して不鮮明な大型病斑となる。葉がねじれる場合もある。

6 伝染方法

本ウイルスは、Tospovirus属のウイルスで、ネギアザミウマによって媒介される。ネギアザミウマは、幼虫時に罹病植物を吸汁することによりウイルスを獲得し、永続的に伝搬するが、経卵伝染はしない。その他のアザミウマによる伝搬は確認されておらず、種子伝染や土壌伝染はしない。また、管理作業による汁液伝染は低いとされている。

永続伝搬：ウイルス媒介能力が、長期間～一生持続する。

7 感染植物

現在までに、18科40種以上の植物で、感染が報告されている。(表1)

表1 IYSVの感染が報告されている植物

科名	植物名
リンドウ科	トルコギキョウ
ユリ科	ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニク、テッポウユリ、リーキ、バルビネ、ジャノヒゲ、オオバジャノヒゲ
アルストロメリア科	アルストロメリア
ヒガンバナ科	アマリリス、ユーチャリス、クンシラン、スイセン
アヤメ科	ダッチアイリス
ヒユ科	センニチコウ
アカザ科	ハウレンソウ
アブラナ科	ダイコン、ハクサイ、ブロッコリー、ミズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウ、タネツケバナ、ナズナ
セリ科	ニンジン
カタバミ科	カタバミ
キク科	チチコグサモドキ、ノボロギク
ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ、トキワハゼ
シソ科	ホトケノザ
スベリヒユ科	スベリヒユ
スミレ科	パンジー
ナデシコ科	コハコベ、オランダミミナグサ、ノミノフスマ
マメ科	ヤハスエンドウ
ナス科	Nicotiana benthiana、N.rustica、N.glutinosa

8 防除対策

- 1) 媒介昆虫であるネギアザミウマを防除する。薬剤散布にあたっては、感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。また、施設栽培では、UVカットフィルムやハウス開口部の防虫ネット被覆により媒介昆虫の侵入を防止する。
- 2) 佐賀県、大分県などの薬剤感受性検定により、ネギアザミウマで、一部の合成ピレスロイド系薬剤やクロルペナフィル薬剤の感受性低下が報告されているため、薬剤散布後は効果を十分に確認し、感受性低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。
- 3) 発病した株は伝染源となるので、直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出すとともに適切に処分する。
- 4) ほ場周辺やほ場内の雑草は媒介昆虫の発生源となるので必ず除草する。
- 5) 施設栽培では、栽培終了時にハウスを密閉処理し、媒介昆虫が施設外に飛び出さないようにする。

9 その他

未発生地域で疑わしい症状が発生した場合は、最寄りの西臼杵支庁または各農林振興局(農業改良普及センター)、または病害虫防除・肥料検査センターに連絡する。



写真 ニラえそ条斑病の病徴

《連絡先》

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 壹岐

TEL :0985-73-6670 FAX :0985-73-7499

E-mail : byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp

ホームページ : <http://www.jppn.ne.jp/miyazaki>